

ESDとは「持続可能な開発のための教育=Education for Sustainable Development」の略。環境・貧困・人権・平和など、私たちが直面するさまざまな問題に取り組み、豊かで公正な未来を創造するための「価値観」と「スキル」を育む、未来創造型の学びです。「国連持続可能な開発のための教育の10年（ESDの10年）」が2005年からスタートし、世界各国で取り組まれています。



特集

生物多様性と人づくりのいい関係

2010年10月11日から生物多様性条約第10回締約国会議（CBD/COP10）が名古屋で開催されます。この会議を契機に、「私たちの生命と暮らし」が生物多様性によって支えられていることを再認識し、生物多様性を大切にしたい社会をどうつくっていくのかを考えることが重要です。

ESD-Jは、そのような社会づくりには、地域の自然や風土に基づく暮らしの知恵や地域独自の文化を大切に思える人を増やし、そんな人々とともに、よりよい地域をつくっていくことの重要性に着目しています。

今号は「生物多様性」と「ESD」をテーマにお届けします。

目次

特集 生物多様性と人づくりのいい関係

学びの場をデザインする 藤前干潟を守りぬいた「学び」の要素.....	2
つなぐ人の視線 自分の思っていることを追求すれば、決してがっかりする結果にはならない.....	4
数字でみる“社会” 110種.....	4
身近な活動のESDらしさ 公園内の未利用地で冒険遊び場づくり.....	5
ESDリレーコラム 岩木山自然学校、あいあいネット、田んぼの学校.....	6
ESD-Jの活動紹介 スラバヤワークショップ報告.....	7
トピックス いよいよCOP10がはじまります.....	8



藤前干潟を守りぬいた「学び」の要素

市民のエンパワメントと価値観・社会観の見直しのプロセス

生物多様性保全の象徴「藤前」

愛知県名古屋市にある伊勢湾奥部の干潟・浅海域は、高度経済成長とともに臨海工業開発用地造成など次々と開発が進みました。その開発から逃れ、日本最大級のシギ・チドリの渡来地となったのが「藤前干潟」です。

しかし、1984年に名古屋市は藤前干潟を候補地とした「ごみ最終処分場建設」計画を発表。その後15年にわたる増大するごみの処理を緊急課題にもつ行政と自然環境保全を求める市民団体との対立と交渉の末、1999年名古屋市は処分場建設計画を中止しました。

ESD-Iが進めている「ESD×生物多様性」プロジェクトでまとめた事例レポート「藤前干潟保全活動に学ぶ」(「ESD×生物多様性」プロジェクト2009報告書)では、藤前干潟が開発から保全へと大きくシフトした要因に、1) 必要な情報を必要なタイミングで収集、広く分かり易く提供する、2) 参加の門戸を多様にし、だれもが参加し対話できる場をつくり、だれもが当事者になる、3) 国際NGOの後押しや政府の動きなど外部支援を得る、4) 戦略的にすすめるリーダーシップと、参加した人々や組織の力を集結し、社会の流れを読み取り仕掛けをつくるプロデューサーの存在、の4点があげられています。

今回の学びのデザインは、持続可能な社会づくりに向けた重要なプロセスについて、藤前干潟保全の事例レポートから見出した、(1) 情報の収集と提供 (2) 開かれた参加と対話の場、という2点を中心に、市民の意識と行動を変えた「学び」のあり方について考えたいと思います。

情報の収集と提供 ～現場を見る、知る、学ぶ

藤前干潟保全のプロセスにおける情報提供の特徴は、行政、国会議員、マスコミ、

地元住民、国内外のNGOなどあらゆる対象にあった手法を使い分け、内容を吟味して戦略的に藤前干潟の価値を伝えたことです。

市民には伝わりやすい言葉で表現したニュースレターの発行や講演会、現場視察のツアーなどを実施。市民が意見や提案を出しやすくするために、行政の情報を要約してわかりやすく提供するなど行いました。さらに、マスコミを活用した情報提供を行い、「今何が起きているか、どのような選択をしなくてはならないのか」を考えるきっかけを作り、世論の形成を促しました。

また、現場での体験を重視し、干潟の渡り鳥や生き物と出会う場として、干潟に入るイベントや学習の機会をつくりました。参加した市民は、「干潟に集まる渡り鳥の餌場を、自分の出すゴミでつぶしたくない、多様な生き物を育む干潟を壊したくない」と干潟のもつ価値に気づき、人間のライフスタイルによって環境を悪化させている状況を変えなければ、と共感の環が広がっていきました。

また、行政側が藤前干潟の環境影響調査の分析結果としてまとめた「環境影響評価準備書」を国内外の専門家や研究者に送り意見を求め、その意見をまとめた「意見書」を作成し行政側に送付するなど、科学的な情報の共有、提供を行いました。

このように、あらゆる対象に必要な情報の提供、干潟のもつ価値や魅力を五感で体感できる機会の創出、専門家や研究者による科学的な分析結果の収集提供など、地域住民や全国の市民が、今現場で起きていることや自分との関わりを知るためのアプローチがなされました。そして、現状を知ることによってどのような関わり方や選択をすべきかという課題に真摯に向き合い、住民や社会の価値観に変容をもたらす基盤ができてきました。

通常、こういった公共事業に関する情報は、自治体が広報などの媒体を使って、公

平性の原則のもとで画一的に提供されてきました。しかしそれだけでは十分でなく、NPOやNGOによる対象に合わせた方法や内容、アプローチで、対象者が「自分の問題」と捉えられるような、情報提供や現場を知る体験の場の創出が必須なのです。

また、行政から提供された情報を多様なステークホルダーに届け意見を収集するなど、双方向の情報のやりとりが重要となります。

開かれた参加と対話の場

藤前干潟保全の運動は、名古屋市が政策決定をしたあとの計画に対して異を唱えるものでした。行政が作成した計画書や環境影響評価準備書、見解書など作成されたものに対して、要望・意見書を提出するという関係性でした。

藤前干潟のような地域の公共財産を保全・管理するためには、多くの市民の理解と共感、参加が重要です。

そのためには、行政や事業者など関係者だれもが参加でき、自分たちの財産としてどう保全・活用するかについて、思いを伝えあう場、議論を交わす機会が必要です。

藤前干潟の15年の運動のプロセスにはそういった場がほとんどありませんでした。しかし、保全決定後は、多様な立場の人が対話する会議体である「藤前干潟協議会」が設置され、関わる人々の思いや価値観をぶつけあいながら検討する場がつけられています。

また名古屋市は、ごみの埋め立て場を確保できなくなったため、市民や事業者との協働による徹底的な減量政策を打ち出し、ごみ減量を実現しました。その後、「なごや循環型社会・しみん会議事項委員会」を設置し、2年間にわたり参加型会議を実施して「しみん提案」をつくりあげ、行政計画に市民意見を反映させるなど実質的な市民参加に挑みました。

社会を変える具体的な動きを どうつくっていくか

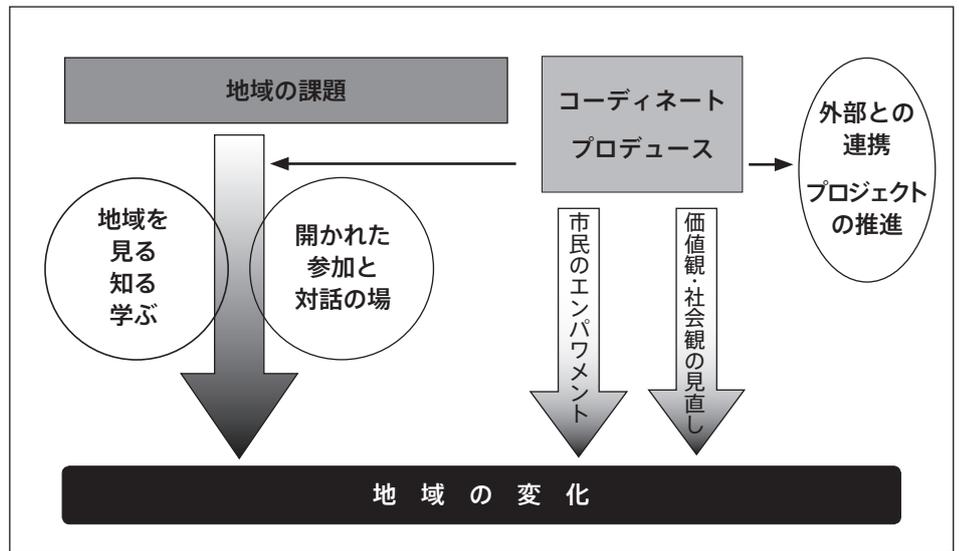
藤前干潟を保全に導いたプロセスには、多様な情報提供によって当事者意識の育成と世論形成するという学びのアプローチと並行して、運動を推進する戦略的なアプローチがありました。それは、国際 NGO や国内の他分野 NGO、超党派議員、弁護士、地域住民などあらゆるステークホルダーを巻き込み、知恵や力、ネットワークを集結し、必要なときにその力を有効に活かしたことです。また、粘り強い行政との交渉や働きかけなど、多様なアクションが「藤前保全」の実現には無くてはなりませんでした。

そのような活動を企て実施するためには、リーダーシップや交渉力をもつ人材、そしてその人材によって構成される組織が必要です。さらに、ファシリテート力、コーディネート力に優れたメンバーの存在により、他の組織との協働も生まれ、活動および組織を持続発展させることが可能となります。そのような人材を地域で育てることも ESD の E として重要性であると強く感じさせられました。

以上のように「学びのアプローチ」と「運動を推進する戦略的アプローチ」が車の両輪のように地域と社会動かし変化をもたらすというプロセスこそが ESD であると、藤前干潟保全活動から読み解くことができます。

ESD 的な学びの展開と社会を変える具体的な動きをどうつくっていくか、地域で ESD に取り組む多くの実践者とともに、私たちもさらに深めていきたいと思えます。

(ESD-J 佐々木 雅一)



ESD 的学びと社会の変化



藤前干潟協議会のようす



参考文献：「ESD × 生物多様性」プロジェクト 2009 報告書」p39-44 藤前干潟保全活動に学ぶ～生物多様性空間を保全管理する地域の仕組みづくり～
 協力：ESD 中部イニシアティブプロジェクト「ESD × 生物多様性」チーム 村瀬俊幸さん、新海洋子さん、特定非営利活動法人 藤前干潟を守る会 亀井浩次さん
 写真提供：特定非営利活動法人 藤前干潟を守る会 環境省 名古屋自然保護官事務所
 ホームページ (<http://chubu.env.go.jp/wildlife/fujimae/book/index.html>) より抜粋

今号のつなぐ人の視点は、スリランカの社会活動家で、サルボダヤ・シュラマダーナ運動の創始者であるアリヤラトネ博士を招き、9月11日（土）に開催したESDカフェでお聞きした博士の話をもとにお届けします。

自分の思っていることを追求すれば、決してがっかりする結果にはならない

 サルボダヤ運動について教えてください。

1958年、当時スリランカ1、2を争う名門高校の教師だった私は、子どもたちへの教育に疑問を感じていました。当時の勉強はとにかく教科書を学び、雇用に就くことだけが目的でした。

教室の外に連れて行き、教科書や試験から脱却し真の意味で人を愛し奉仕を行える人を育てたいと考えました。そこで、生徒たちを休みや週末のたびに、貧しい人々が暮らす地域へ連れて行き活動をするようになったのです。交通費は自分たちで出し、食糧も調達しました。村は宿泊のスペースを提供してくれました。肉体労働を7時間から8時間、村人と一緒に道路をつくったり井戸をつくったり。労働が終わると皆で床の上にすわって3、4時間話し合いをしました。

それから3~4年の間に、サルボダヤ運動は国内でも最も大きな農村運動のひとつとなり、またたく間にいろいろな場所から声がかかるようになりました。1972年、教師と農村運動の二足のわらじを続けることが難しくなり、仕事をやめボランティアに専念しました。それは決して容易なことではなく、多くのことを犠牲にしなくてはなりませんでした。

 どうして教育の改革を？

教えていた生徒が卒業後、地域社会から離れ、文化や奉仕からも離れていきました。学ぶ目的は「将来、できるだけ稼ぎたい」

それが全てでした。地域へ奉仕をしようという子どもが全く育ちませんでした。もちろん学校で各教科を学ぶことも必要、だが人生は何なのか学び、幸せのために知識を活用できる人間を育てたいと考えました。



 どうして活動の場所として貧しい村を選んだのですか？

貧困は世界において最大の問題。人は貧しいとパワーが出てきません。貧困が犯罪をまねき、さらに深刻な貧困へと悪循環を生みます。スリランカの貧しい地域の村を訪問して、肉体労働だけではなく村の人が知らない世界を教えていきました。非暴力の考えをもとにした社会的な革命が起こり始めました。そして、子どもたちも暴力から離れていきました。

 サルボダヤ運動が目指すものとは？

世の中には2つの動きがあります。1つは先進国に見られるような発展を続ける動き。いかに生産を高めるかGDPを高めるか。森林の伐採をしようが関係ありません。もう1つは貧しい人々の

110種

1日に地球上から消えている生物種の数

“毎日まいにち110番”と覚えてください。言い方を変えると、「13分に1種」地球上から生物種が消えています。私たち人間が今、名前を付けている種は175万種程度。しかし、地球上には3千万種~5千万種の生物が棲んでいると推測され、私たちは、その20分の1も判ってはいないのです。ましてや、生きもの同士のつながりは……？

最近、スズメの個体数が半減しているとの発表がありました。私の庭でも、昨年3分の2程度に減っています。大きなカタツムリが見られなくなり、ジョロウグモも、巣を張らなくなりました。その身近な庭やベランダが、都市の生物

多様性を支え、地球規模の生物多様性につながっていることに、世界的な注目が集まっています。私たちも、だれもが参加できる生物多様性の保全活動として、昨年からは日本では初めての

「お庭の生きもの調査」を開始しました。その全国979世帯からの情報を、COP10の交流フェアで発表します。

NPO 法人生態教育センター理事長 小河原孝生 (ESD-J 団体正会員) <http://www.wildlife.ne.jp/ikimono/>



数字で見る“社会” 第5回

運動。環境を守り天然資源を守ろうという動きです。破壊的な開発のプロセスを経ることなく、持続可能な開発にたどり着くための道筋が必要です。

サルボダヤ運動はそれを目指しています。持続可能な開発にたどり着くためには、欲望から解放され生き方を変えなくてはなりません。そして、生活に必要な資源を減らさなくてはなりません。そうしなくてはとも地球は保たれません。

人間は食べるために生まれてきたわけではありません。物質を享受するために生まれてきたわけではありません。本来人類は、精神性の高いところへ到達するために生まれてきたのです。一握りの上層部の者が権利をもつくみは良くありません。サルボダヤで学んだ人はボランティアの精神、非暴力の精神で学んだことを実施します。

 活動が続ける中で最もうれしかったことは？

幸福というのは自分の心のあり方次第。人の幸せな姿を見ることが、幸福な気持ちにつながります。例えば、喉が渇いているときに水を手にしたとします。しかしそこへ自分よりもっと喉が渇いた親子が現れたら、その親子に水を差し出すでしょう。親子が水を飲み、心の底から喜んでいる姿を目にする、これが真の幸福です。自分の思っていることを追求してほしい。それは決してがっかりする結果にはなりません。

 わたしたちは、お金とどのようにむきあっていけばよいのでしょうか？

お金の使い方としては透明性が必要です。お金の流れや使い道をはっきりとさせなければなりません。それと、全てのことをお金で解決しようとしてはいけません。自分が明確にやりたいという考えがあればお金はあとからついてきます。

 生物多様性について、どう取り組んでいけばいいのでしょうか？

スリランカでは、サルボダヤの取り組みを取り入れて政府として

サルボダヤ・シュラマダーナ運動

1958年にA.T. アリヤラトネ博士がスリランカで創始した農村開発運動。サルボダヤは現在、15,000以上の村で活動する世界有数のNGOとして、教育、保健衛生、社会福祉、収入向上、マイクロクレジット、ソーシャルビジネス、フェアトレード、環境保全、平和構築など幅広い活動を行っている。地域の資源を有機的に結びつけ、住民が協力して問題解決のために行動するシュラマダーナキャンプ、参加型手法を取り入れたリーダーシップトレーニングなど、人々が自らの力と可能性に気づき、コミュニティ開発の主体として民主主義的な方法で参加できるようなさまざまな手法が、50年の実践をとおして開発されてきた。



実行しようとしています。生態系や環境という問題においては日本の政府はずっと先進的です（アメリカなどに比べて）。

スリランカの政府は環境的な取組みに一切関与していません（NPO団体への資金援助など）。私たちは、人々の意識を教育をとおして変えていきます。時間をかけて啓蒙していけば人々は変わります。そして村の人たちも生物多様性の観点について精神性と合わせて学ぶことが必要です。もう一つの手段は代替的な経済のあり方を模索するということです。無駄を起すような経済構造ではなく、資源を無駄にすることなく個人々が持続可能な生活を築いていくことが大切です。そしてもっとも大切なことは、いまこの瞬間にハッピーであると感じられることです。私はみなさんとうとう時間をともにできて、とてもハッピーです。

ESDカフェ進行：ESD-J 野口扶弥子

記録：ESD-J インターン 加藤健太郎、内藤理恵

編集：ESD-J 佐々木雅一

編集協力：サルボダヤ JAPAN <http://www.sarvodayajapan.org/>

発見

身近な活動の — 公園内の未利用地で冒険遊び場づくり ESDらしさ

本来は公園なのに、ごみの不法投棄などの問題があって普段はフェンスで閉ざされている場所がありました。そこには遊具はなく、木々や木陰があり、定期的な管理以外は草が伸び放題でした。この身近にあって自然のままの場所を、全国的に広がっている子どもたちが自分の責任で自由に遊ぶ「冒険遊び場」にしようと、子育て中の母親達と一緒に活動を始めました。

公共の場所であり、地域のみならず使える場所にしていくために、自分たちだけでなく地域の人々や学校、幼稚園、役所やNPOなどいろんな立場の方と一緒に取り組むようになりました。ある時、公園管理者も交えて危険個所の話をしていると、結果的にかなりの木や枝が切られてしまい、木登りできる木が少なくなっていました。しかし管理者の立場も理解できますし、人が入ると自然は傷つきます。子どもの自由なあそび場と環境保全を並立することはきれいごとばかりじゃ成り立ちません。一方、自然に対する感性を持ち続けなければこの場所の魅力は薄れてしまいます。

これからもいろいろ学びながら、魅力的なあそび場をつくっていきたくて考えています。（井上和彦 天竺のはらっぱであそぼう会）





セッケン
9 ESD-J 地域を考え、地域で活動

NPO 法人岩木山自然学校 理事長 高田 敏幸 (団体正会員)



「Think Globally act Locally」と言われてきました。しかし、2 年前から「Think Locally act Locally」を合言葉とし、地域に根ざした活動へと変化させてきました。地方で活動する私どもは、環境性や社会性に対し強い思いを持って活動を進めてきましたが、経済が伴わず、組織として持続不可能であると感じました。経済性を助成金、補助金で補った活動ばかりでしのいで来ましたが、組織としての経済基盤を自立し、本当に持続可能な組織と活動を目指すためにも、持続ある地域づくりへと活動の重点を置くようになりました。



現在、私の住む集落で地域づくりに取り組んでいますが、住民の意識を変えることは、とても難しいことです。まずは、現状の問題を意識するところから始めなければなりません。この 2 年半さまざまな問題提起をしてきましたが、住民の目は冷めています。月一回広報紙を発行し全戸に配布し、気長にこちらの意図を投げ込み続けています。私の言う 10 年先の飯より、明日の飯をどうするかの方が大事なのです。この不景気では当たり前のことです。しかし、明日の飯も、10 年先の飯も同時に考えていくことがとても重要なことだと思っています。まだまだ思いは通じませんが、あせらず、こつこつと活動を進めて行きたいと思います。

←岩木山をバックに地域の方々と

セッケン
10 ESD-J 生物多様性＝地域の暮らしの作法＝ESD！

一般社団法人 あいあいネット 壽賀 一仁 (個人正会員)



あいあいネット (いりあい・よりあい・まなびあいネットワーク) は、コミュニティを基盤とした地域資源の共同管理 (いりあい) と住民自治 (よりあい) に関心をもち、共同調査や経験交流 (まなびあい) を進めているネットワークです。現在は日本とインドネシアを中心とした農山村の交流のほか、国内外でコミュニティ開発にかかわるファシリテーターの研修や経験交流に取り組んでいます。

ESD の基盤である「地域」は、動植物を含む暮らしの場という横の広がり、精霊やご先祖様から子孫へという縦のつながりの両方をもっています。たとえば私が交流しているジンバブウェの村のよりあいでは、必ずはじめに霊媒師の方がお祈りを捧げ、動植物に姿を変えて自然界に棲むさまざまな精霊とご先祖様にも参加してもらいます。それは、過去・現在・未来のひとと生物がよりあうことで、いま生きている人間のための開発や発展だけでなく、多様な生物全体のための世代を超えた暮らしの充実や充足に意識を向ける「地域」の智慧なのです。

世代を超える地域の暮らしの作法を創り続けることは、その暮らしを豊かに支える生物多様性につながります。それはまさに ESD ではないでしょうか。地域それぞれの ESD を促進しあう交流と対話をぜひ一緒に進めていきましょう。



山村文化をまなびあうインドネシアと日本の交流

私たちが ESD-J に入ったわけ

自然農で、伝統的な田んぼの営みと暮らしを体験

田んぼの楽校 (団体正会員 2010 年 2 月入会)



唐箕 (とうみ) で籾だけに選別中。足踏み脱穀機など昔の道具は欠かせません

日本人にとっての ESD とは、かつての田んぼを中心とした暮らしの営みの中にあると思う。田んぼの楽校では、親子を対象に、耕さず、草や虫を敵とせず、肥料・農薬・機械に頼らない「自然農」による稲作と生き物観察、季節ごとの旧暦行事などを毎月行なっている。昼食も、毎回山菜や採れたての野菜を中心に、子どもたちがお母さんたちと一緒に料理し、お米と味噌及び味噌大豆は自給している。

かつては、山の田圃は食糧生産の現場であるとともに、集い、学び、遊ぶ場であった。広い空の下で、大人たちの汗する後ろ姿を見ながら、祖先から受け継がれた大切なことを自然と会得していく場であったと思う。そのような伝統的な田圃の姿をお手本にしている。

アジア NGO ネットワークに向けた第一歩

スラバヤワークショップ報告

ESD-Jは、8月1～4日の日程で、インドネシアのスラバヤ近郊で、アジアでESDに取り組むNGOのネットワークの意義・必要性を検討するワークショップを開催しました。ワークショップには、アジア実践事例交流事業（AGEPP、トヨタ環境助成による事業）のメンバーを中心とする5ヶ国のNGO7団体から11名が参加。ESDの10年最終年（2014年）をめどにした、アジアにおけるESDのNGOネットワーク発足に向けた動きが再び始まりました。

2003年の設立以降、ESD-Jは地域をベースにESDを進めているNGOの役割を重要視し、活動を促進するようなネットワークの必要性を訴えてきました。2005年より具体的なネットワーク設立に向けた検討をアジアのNGOと進め、ESD-AP (Asia Pacific) 設立準備委員会も立ち上がりましたが、十分なコンセンサスづくりができずに活動を終了した経緯がありました。

一方、ESD-Jは2006～08年にかけ、アジア実践交流事業（AGEPP）を実施。アジア6カ国のNGOとともに、地域をベースにしたNGOによる34の持続可能な地域づくり活動を人づくりの視点から文書化し、地域をベースにしたESDの取組みで大切な視点やESDを進めるうえでぶつかる課題などの意見を出し合ってきました。今回のワークショップは、AGEPPの経験を通して培われてきたネットワークをもとに、アジアでESDに取り組むNGOのネットワークについての議論を再開しようというものでした。

ワークショップ企画に際し、ESD-Jは、34事例の一つであるPPLH環境教育センターに着目。90年代のアジア金融危機の頃から一気に進んだ森林伐採、失業と貧困、ジェンダー

などアジアの特徴的な課題を抱えるPPLHの活動実施地で、地球の住民をエンパワーする持続可能な地域づくりへの取組みを間近に感じながら、アジアの人同士が議論することに意味があるといった理由で、この地をワークショップの開催地として選びました。

今回のワークショップでは、34事例の特に生物多様性の視点分析をベースに、私たちNGOが定義する持続可能な開発やESDの在り方、NGOの役割、学校や行政、高等教育機関との連携の在り方、伝統知と科学知を結び付け持続可能な地域づくりのための知をつくり上げていくプロセスなどを取り上げながら、ネットワークの意義や、求められる機能、そしてNGOがより主体的にネットワークに参加できるようなオーナーシップの在り方を議論しました。議論の成果として、NGOによるNGOのためのネットワークの必要性/重要性を確認し、2014年をめどにした立ち上げと、ESD-Jが暫定的な事務局となること、34事例のさらなる分析と、事例のメディア化、事例を使った研修プログラム開発とさらなる事例の収集といった活動目標を立てました。これらの目標の実現に向け、事業化と資金調達が次なるステップとなっています。

さらに、事例分析の議論を発展させ、10月に名古屋で開催される生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)にむけたAGEPPネットワークからのメッセージも取りまとめました。COP10では、生物多様性保全におけるESDの重要性とともに、生物多様性保全分野の皆さんと一緒にESDを進めていきたいと思いますというメッセージをアピールします。

ESD-J 野口扶弥子



↑会場で出されたキーワード。地域を核に、ESDの重要な視点を整理した

→現地視察で訪れた有機農民グループのための集会所。田んぼの真ん中に立つ



→PPLHのシンボル、バニヤンの木の前で参加者全員と。会合を通して顔を合わせ続けることがネットワークの基盤になると確信



→窓のない会議室のすぐ外は森。会議中に生物多様性部門を代表し、スペシャルゲストのチャグロサソリ氏が登場



トピックス いよいよ COP10 がはじまります

10月11日より生物多様性条約に基づくMOP5とCOP10が開催されます。しかし期間中具体的にどんなことがあるのか、ご存知ない方もいるのではないのでしょうか？ COP10の基本的なことについて、ESD-J学生ボランティアチームより紹介します。

Q.COP10とはなんでしょうか？

⇒ COPとは、国際条約を結んだ国同士が議論する会議（締約国会議）のこと。今回は、生物多様性条約に基づくカルタヘナ議定書第5回締約国会議（MOP5）（11～15日）、そして生物多様性条約第10回締約国会議 COP10（18～29日）が開催され、生物多様性保全に向けた新たな目標など重要な事項が討議されます。

Q.COP10に参加することはできますか？

⇒ 一般の方も傍聴として参加することができます。事前登録はすでに締め切られています。期間中も必要書類を持参すれば会議場で登録ができます（詳細は www.cbd.int にて確認ください）。またその他にも、会議場近くの白鳥公園、「愛・地球博」が行われたモリコロパーク、名古屋の中心街にある栄オアシス21の3ヶ所を中心に一般の方も楽しめるイベントがたくさん企画されています（www.cop10.jp）。

Q.一般向けにはどのようなイベントがありますか？

⇒ 展示やトークセッション、ライブなどのステージイベントのほか、さまざまな自然観察会もあります。そのほか、7世代先の子どものために歩くというコンセプトで活動する『7 Generations walk』（7gwalk.org/walkcop10）や、世界の13の先住民族のおばあちゃんからCOP10へのメッセージを発表する『13人のグランマザー in あいち』（motherspirit.org/grandmother/nagoya.html）も参加してみたいと思いました。また、国際会議場のある白鳥公園では「生物多様性交流フェア」（www.cop10.jp/fair/）が開催されNPOや大学、企業のほか、海外からも出展があります。ESD-Jも出展しますのでぜひ足を運んでください。

Q.ESDに関するイベントは？

⇒ ESD-Jは期間中「ESD×生物多様性」COP10セミナーを開催します。

日時：10月19日（火）11:00-16:00

会場：名古屋学院大学体育館1階 小会場2（生物多様性交流フェア会場内）

参加費：無料

詳細は www.esd-j.org/j/event/pc/ をご覧ください。また、その他にも地域づくりや教育など特にESDに関連する議論・イベントを「ESD×生物多様性しんぶん」（www.esd-j.org/j/book/book.php）でも紹介していますので、そちらをご覧ください。

Q.そのほかの楽しみは？

⇒ 名古屋名物と言えばやはり味噌かつやひつまぶし。そして赤エビや大あさりなど三河湾で育った海の幸も豊富！ COP10に行ったついでにおいしいものを食べて帰るのもいいですね。某名古屋通の方のおすすめは『あつた蓬菜軒』のひつまぶし。白鳥会場の近くなのでCOP10にお立ち寄りの際には是非。

ESD-J学生ボランティアチーム

ESD-J だより

7月～9月の活動

- 7月6日 SR円卓会議人づくりワーキンググループ 出席
- 7月9日 ボランティアカフェ 開催
- 7月12日 文科省ユネスコP 第1回多摩市ESD実践研修 開催
- 7月12日 CBD市民ネット開発作業部会公開学習会 開催
- 7月21日 ESD×生物多様性分析検討会議 開催
- 7月23日 CBD市民ネット開発作業部会 出席
- 7月29日 第15回ESD関係機関情報交換会合 出席
- 8月1-4日 アジアNGOネットワーク検討ワークショップ 開催
- 8月2日 文科省ユネスコP 文京区ESDセミナー 開催
- 8月4日 文科省ユネスコP 多摩市ESDセミナー 開催
- 8月9日 玉川大学ESDセミナー 出席
- 8月9日 ボランティアカフェ 開催
- 8月11日 環境省ESDコーディネーター育成検討会
- 8月16日 東洋製罐戦略ダイアログ第1回 開催
- 8月23日 東洋製罐戦略ダイアログ第2回 開催
- 8月26日 CBD市民ネット開発作業部会 出席
- 8月26日 ユネスコスクールにおけるESD普及促進活動事業委員会 出席
- 9月2日 東洋製罐戦略ダイアログ第3回 開催
- 9月3日 SR円卓会議人づくりワーキンググループ 出席
- 9月6日 ESD×生物多様性分析検討会議 開催
- 9月6日 文科省ユネスコP 第2回多摩市ESD実践研修 開催
- 9月10日 地球市民会議 共催
- 9月11日 スポーツESDキックオフミーティング 出席
- 9月11日 第11回ESDカフェ 開催
- 9月14日 CBD市民ネット開発作業部会 出席
- 9月15日 立教大学CSR×ESD人材育成プログラム発表会 出席
- 9月28日 環境省NGO連携検討会合第1回 開催

編集後記

今回はじめてESDカフェに参加し、改めて教育の重要性を実感することができました。持続可能な社会をつくるためには、わたしたちの価値観や意識を改めることが必要不可欠で、そのために最も大切なことが教育でありESDなのではないかと私は考えています。サルボダヤ運動が、より良い職に就くための学習を行っていた学生に奉仕の精神を芽生えさせたように、ESDを通じてより良い未来づくりに関われるような活動を私も行っていきたくと考えています。（ESD-Jインターン 慶應義塾大学 加藤健太郎）

認定NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議 (ESD-J)

<http://www.esd-j.org/> e-mail: admin@esd-j.org

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-67 コスモス青山B2F

TEL: 03-3797-7227 FAX: 03-6277-7554

● 会員募集中：正会員（10,000円）、準会員（3,000円）詳しくはHPをご覧ください ●



発行：認定NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議 編集：ESD-J情報共有プロジェクトチーム レイアウト：河村久美



この印刷物は、適切に管理された森林の認証木材から作られた紙と、フードマイレージに配慮し、米ぬか油を使用したライスインキで印刷しています。